

新撰
小學修身書

文學社編纂
嘉言篇
三

東 京 圖 書 館

新書門

士

八

部

類

函

架

號

冊

K/110.1
184
3

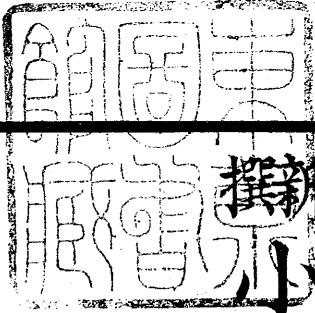
文學社編纂 嘉言篇

新撰 小學脩身書 全一十冊

東京大坂



文學社發兌



新撰小學修身書卷之三

文學社編纂

第四章

○ 身を修むるは、五倫五常の道を行ふにあり、

父子親あり、
君臣義あり、
夫婦別あり、
長幼序あり、
朋友信あり、
是を五倫といふ、

親とは、相親しむ愛する
なり、
義とは、宜しきに従ひて事
を行ふなり、
別とは、夫と婦との間に、
自差別ありて、愛に押れ

す、禮を踰へざるをいふ、
序とは先後の順序ある
をいふ、
信とは誠實にして偽な
きをいふ、

○呂希哲曰、孝子の親に事

ふるは、事々に躬親すへし、
○貝原篤信曰、父母に對し
ては、色を和け、氣を下し、温
和を主として事ふへし、
○父母命して呼へば、即
唯して行く、業あれば、必

投し、卧したりと雖必起つ、
子童

習

○貝原篤信曰、毎日夙に起きて、家庭を掃除し、父母の安否を問ひ、飲食する所あらは之を羞め、務めて其の歡

心を盡すべし、

○凡る世の人、貴となく、賤となく、父母の生さるはなし、父母は我が身の本なれば、本をは忘るまじきことなり、況や養育の恩は、山よりも高

く海より也深し、六諭 衍 義大意

○平田篤胤曰、我が皇國の民にして、神を蔑し、國を誣り、君を卑しめ、其の祖先を忘るゝ、是を人にして人に非すと謂ふ、

○司馬光曰、恩あるに遇ひては必報す、故に臣となりては必忠、子となりては必孝、
○孟軻曰、徐行して長者に後るゝ之を悌といひ、疾行して長者に先たつ、之を不悌

といふ、

○朱熹曰、長者教誡するこ
とあらは、首を垂れて之を
聽くべし、妄に自議論す
べからず、

○貝原篤信曰、人の心の信實

なるは、萬行の基礎にして、
人に交る道なり、

○又曰、朋友の交には信
を本として、禮義を盡し、真
實の志を致すべし、

○孟軻曰、善を責むるは朋

友の道なり、

○徳川家康曰、驕情なる者は、親戚之を踈ん、明友之を踈ん、婢僕亦之を踈ん、て、百事成る所なし、遂に身を怨み、天を怨むるに至る、

○貝原篤信曰、人を譏るは莫大の悪事なり、戒めて人の非を言ふ一からず、
○又曰、人の過は、吾か心に之を知るとも、妄りに口に出す一からず、

○孟軻曰、學問の道は他な
し、其の放心を求むるのみ、
○貝原篤信曰、人生れて學
はざるは、生れさると同じ、
○又曰、學問に、有用の學と、
無用の學とあり、有用の學

を以て、無用の學をす
べからず、

○保科正之曰、節儉を守り、
身を慎みて、風俗を亂ること
勿れ、宮室を飾り、衣服を美
にして、以て人に誇るは、君子

の耻つへき所なり、

○佐藤坦曰、勤の反を情とし、儉の反を奢とす、

○貝原篤信曰、家を保つ道は、勤と儉とにあり、勤儉ならずは、財を失はず、能く家を

保つへし、

○常盤貞尚曰、儉にして施を好めは、施を受さる者も、尊ひ、儉にして、慈なければ、知らさるものも、亦憎む、
○明の倪元路曰、口腹を縦

にし逸樂を事とすれば、衣食必足らず。

○貝原篤信曰、君子は、足ることを知りて、貧らざる故に、身は貧なるも、心は富む。

○又曰、小人は、足ることを知らずして、貪るを務む、故に、身は富むと雖、心は貧し。

新撰小學修身書卷之三終

K110,1

卷之三

明治十五年十月五日版權免許
同十七年十二月出版

定價五錢

編纂兼
出版發兌

發賣

文學社
東京本町四丁目十六番地

文學社支店
大阪本町三丁目十六番地